

光 文 社 時 代 小 說 文 庫

伊達政宗(五)

長編歷史小說 山岡莊八





光文社文庫

長編歴史小説

伊達政宗(五)

著者 やま山 おか岡 そう荘 はち八

昭和61年 4 月20日 初版 1 刷発行
昭和62年 3 月10日 11刷発行

発行者	大	坪	昌	夫
印刷	凸	版	印	刷
製本	明	泉	堂	製本

発行所 株式会社 光 文 社
〒112 東京都文京区音羽2-12-13
電話 東京 03 (942) 2241(代表)
振替 東京 6-115347

© Sōhachi Yamaoka 1986

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-334-70332-1 Printed in Japan

文庫

江苏工业学院图书馆

小説歴史編

章宗球達伊蔵

八壯岡山



光文社

伊達政宗 (五) 目次

鐘は鳴る鳴る	9
戦いの実相	50
大坂冬の陣	90
わが持つ鎚 つち	130
戦と運命	170
火 車	209
政治のこころ	250
偃武 えんぶ の装い	291

伊達氏家系略図

植宗

晴宗
義宣(大崎家を継ぐ)
実元(成実藤五郎)
宗澄
某(四郎・家臣の桑折家を継ぐ)
晴胤(葛西家を継ぐ)
宗清
宗殖(家臣の村田家を継ぐ)
綱宗(家臣の巨理家を継ぐ)
元宗(綱宗死後跡を継ぐ)
康甫(東昌寺住)

親隆(岩城家を継ぐ)
輝宗
義姫(最上氏)
政景(留守家を継ぐ)
昭光(石川家を継ぐ)
盛重(国分家を継ぐ)
直宗

政宗(梵天丸)
小次郎(竺丸)
愛姫(田村氏)
正室系
五郎八姫(家康八男松平忠輝室)
忠宗
綱宗
綱村
吉村
宗良(田村家を興す)
竹松丸
宗綱
秀宗(母飯坂氏・宇和島藩祖)
宗利
宗贇(むねよし)
宗清(母飯坂氏・飯坂家を継ぐ)
宗信(母多田氏)
宗泰(母塙團右衛門氏)
宗高(母柴田氏)
牟宇姫(母柴田氏)
宗実(母芝田氏・伊達成実の跡を継ぐ)
宗勝(母貝野氏)
姫(母只野氏・巨理宗実室)
千菊姫(母村上氏)
側室系

正室系

宗良（田村家を興す）

綱宗——綱村——吉村

五郎八姫(家康六男松平忠輝室)

忠宗

宗綱

竹松丸

秀宗（母飯坂氏・宇和島藩祖）

宗利
↓
宗贊

宗清
母飯坂氏・飯
坂家を継ぐ

宗信(母多田氏)

宗泰（母塙團右衛門氏）

宗高（母柴田氏）

車宇姫（母柴田氏）

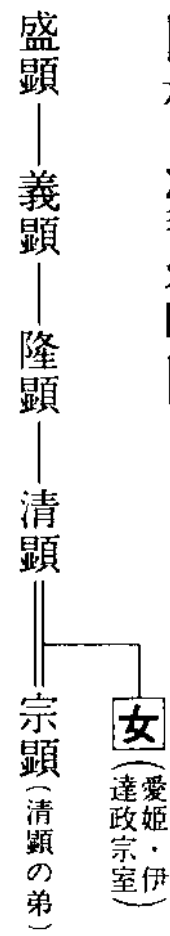
宗実（母芝田氏・伊達成実の跡を継ぐ）

宗勝（母只野氏）

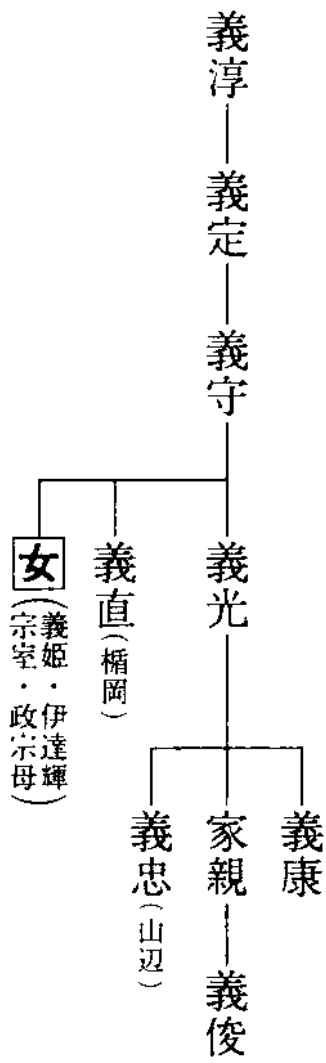
（母只野氏・
日理宗実室）

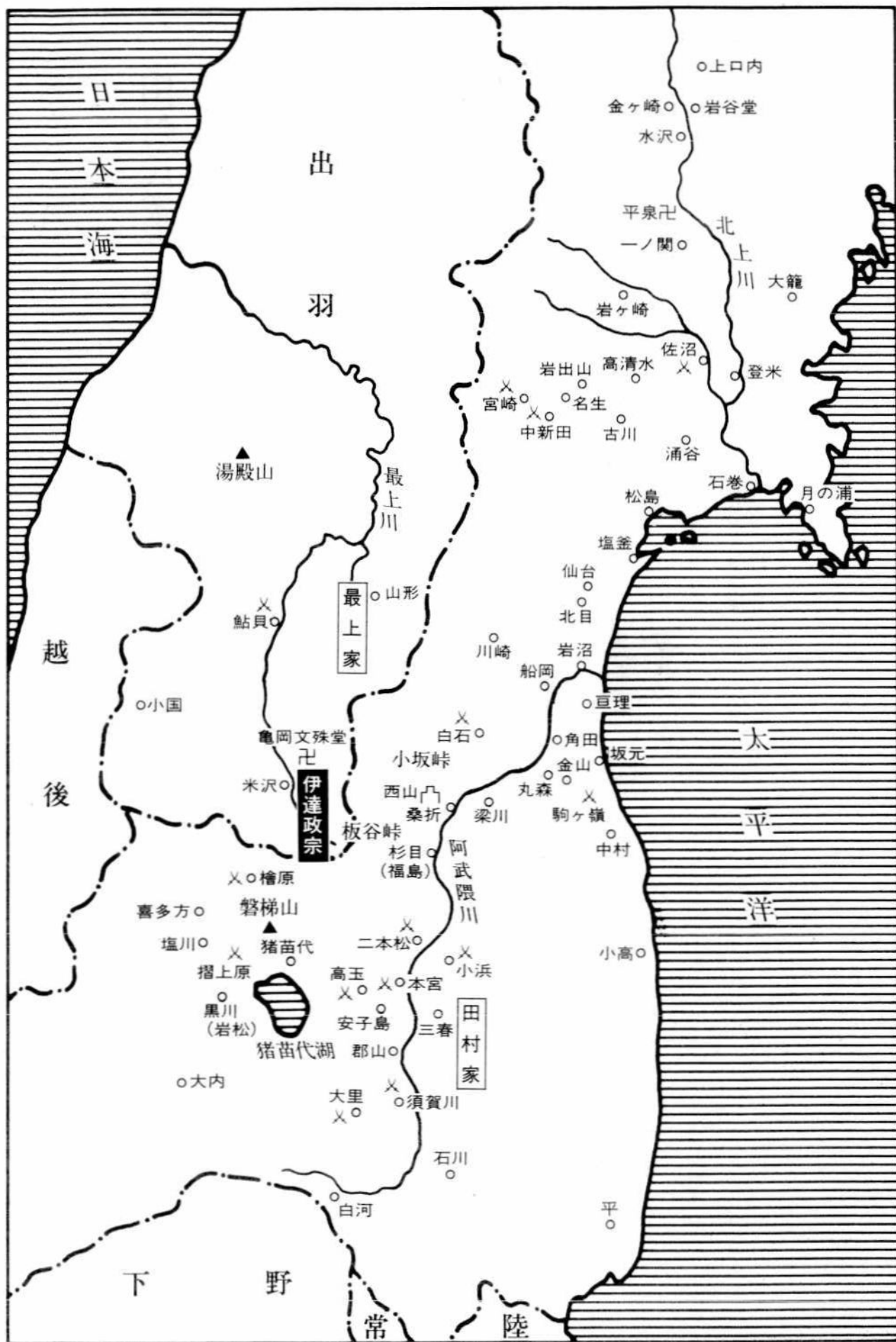
千菊姫(母村上氏)

田村氏家系略図



最上氏家系略図





伊達政宗

卷五

(全六卷)

鐘は鳴る鳴る

1

「大判四万枚と申せば、一両小判で四、五十万両。そのような大金の隠し場所を……？」
柳生又右衛門宗矩は、生まじめな表情で伊達政宗を見返しながら、わざと大きく首を傾げた。
（——これだけ余分の金があれば、相当大きな戦も出来る……）

事実、これから二十余年後の寛永年間に、三代將軍家光が、今日の大日光廟を造営した時の総費用が、ざっと六十万両足らず。諸物価騰貴のおりからなれば、その総額にもまさる金額なのだから、驚くべき額であった。

「この又右衛門のような貧乏人には、想像もなりかねませぬ大金ながら、せっかく鑄直したとあれば元の地金にも返されますまい……これはそっくり大御所にお預けして、当分封印でも致しておいて頂くより他にありませんまいかと」

政宗は大きな声で笑っていった。

「ハハハ……せっかく鑄直した慶長大判、それをそっくり、敵側の総大将に進上するバカもあ

るまい。これで戦は決ったわけじゃの」

「はい。残念ながら、そうなりますようで」

「今までは、大御所の眼の上のコブは大坂城一つであった。ところが、これでコブは二つになった。さて、コブが二つになって戦になると、幾らか勝味は殖ええると思うか？」

「されば……難攻不落の城に夥おびただしい軍費。これで勝つ、と見たいところながら結果は逆で。片桐且元ともあろうお方が、心ないことを致したもので」

「では、当代随一の戦術家柳生宗矩も、この戦は、大坂方の負けと見るわけか」

「はい。但し、ただ一つこれを逆転させる手段はある……と、心得まする」

「なに、勝つ手があると!？」

「はい。全く無いとは言いきれませぬ」

又右衛門は、そこで初めてニタリとした。

「たとえば、大坂方にかくべつの智将があり、これがイゲレスなり、エスパニヤなりの国王に軍艦を借り受けて参りますれば」

「な、なんだと!？」

「そして、その大艦隊を引きつれて、呂宋ルソン、シャムに、越南えつなんなどの各地にあつて出稼ぎしている日本人の牢人どもを艦ふねに満載まんさい、大坂湾に乗り入れて上洛し、関東勢の背後を襲えば形勢は逆転致しましょう。が、それだけの器量人が、果して大坂方に有るか無いかでござりまする」

「フーム」

さすがの政宗も、この時ばかりは、あわただしく独眼を動かした。

「——こ奴、この政宗の、肚の底まで見抜いているのでは……？」

そうになると、政宗もこのままは引き下がれなかった。

「成程、思案はしてみるものじゃ。若しそのような大風呂敷の敷ける者があるとすれば誰であろうかの。亀井琉球守か、それとも大友、有馬の類か」

わざと生まじめに訊き返すと、又右衛門は軽く笑いとばした。

「ご安心なさりませ。そのような大きな事の出来るお方は、当今、日本に二人しかござりませぬ。その一人は松平上総介忠輝さま、そして、もうお一人は、ずっと北にお住居なさる、ようご存じのお方だけ……ハハハ……何れもこれは関東方の柱石におわすゆえ、お生憎さまと申すところで」

「フーム。すると北に住まう一人は、この政宗だと申すのだな」

「はい。それが、大御所の大切な御相談相手ではお話になりますまい」

「柳生！」

「なんでござりまする」

「仮に、わしがそれを企てる……と、すると、これは成功すると思うか。どうじゃ!？」

政宗もさる者ながら、柳生も又相当の化者だった。神妙に首を傾げて考えて、

「いっそ陸奥守さまは、蘭人どもから大筒を買取りおくよう、大御所に助言なされては如何なものか？」

「なに大筒……とは、彼等が売込みに参ったとかいう、国崩しと申す大砲のことか？」

「さよう。その国崩しならば、大坂城の、あの広大な総濠を頭越しに、城閣の攻撃が思いのまゝに出来る由にござります。それを用意させておいては如何なもので」

「何を申すぞ、柳生は……それでは、いよいよ戦は関東方の勝ちではないか」

「はい。どうせ謀叛となりましたら、そのくらいの手を打っておき、いよいよ勝つと、見せておかねば後がいささか危いわけ」

政宗は、あわてて眼の前で手を振った。

「冗談じゃ！ わしが、どうして大坂に味方など出来ようぞ。念には念を入れよのたとえで冗談を申したまでじゃ。したが、その国崩しとやら、それを大御所に買い取らせねば相成るまい。そうじゃ、早速われ等がこれをおすすめしよう」

事実、この時に、オランダから買い取った十門の大砲は、大坂冬の陣の最後に使われ、大坂方の淀君やその妹常高院（京極家の未亡人）の心胆を寒からしめている。

射ち出されたのは、南は藤堂高虎と松平忠直の陣地から、北は備前島から城中めがけて射ち込まれた。

この時の濠の幅は、長いところでは二十丁近くもあった。従来の小銃や銃砲では届かない。それが一斉に城内へ射ち込まれ、その弾丸が、天守閣の柱を砕いて西に傾き、有名な千畳敷へも続々と命中して、畳も壁も吹っ飛ばしたのだから、婦女子の悲鳴と狼狽はただならず、これが直接淀君に和議の決意をかためさせる原因になったのだから見落せない出来事だ。

「そう、もはや、従来の鉄砲や百目筒では話になりませぬ。それがよろしゅうござりました」

柳生宗矩は、しかつめらしく同意した。

その時はそれで済んだ。

恐らく又右衛門は、政宗に叛心があったとしても、こうして卓抜した武器の購入までですすめてあれば、諦めると見たのであろうが、それはいささかの外的外れだった。

2

人間には外部からの圧力で考え直す慎重型もあれば、その逆に、加わった圧力を数十倍の反撥力で払いのけねば承知出来ない叛骨型も存在する。

伊達政宗は、言うまでもなく後者なのだ。

柳生屋敷を外にして、念のために、一応忠輝の浅草屋敷へまわってゆく伊達政宗の胸中は、あやしい叛骨の焰と疼きで燃えあがっていた。

（——小癩な柳生めが、この政宗を、家康にはかなわぬものと踏んでいる……）
 そうなれば意地でも後へは退けなかった。

（——いまに見よ！ 支倉六右衛門が、無事にエスパニヤに着いていたら、どうなるか……）
 支倉六右衛門の実直さに、ソテロの雄弁と遠謀が加わったら、フィリップ三世は眼のいろ変えて軍艦派遣を決定するに違いない。そうなれば、誰にも出来ない筈の破天荒な大風呂敷が、

ヨーロッパからアジアへかけて見事に敷き詰められてしまふのだ。

むろんこの軍艦は、アジアの諸国に散っている乱暴な日本の牢人どもを片っぱしから乗船させてやって来るに違いない。

こうして先ず、南蛮人の砲技術で、海上から堺、大坂と巨弾の雨を降らせ、右往左往しているとところへ荒くれた日本人の抜刀隊を上陸させたら、従来 of 戦争の常識などは遠くどこかへ吹っ飛ぶのだ。

そういえば、この慶長十九年の五月には、支倉六右衛門はすでに、メキシコのサン・ジュアン・デ・ウルアの港から、エスパニヤへ向けて出航しようとして、しきりにその準備を急いでいた。

一行が呂宋（フィリピン）に着いたのが、去年の十月二十八日。これから航路を東に転じて、長い間、雲と水の間を走った。

正月は海上で迎え、メキシコのアカピュルコの湾に着いたのが、一月二十五日。一月二十五日といえば家康と秀忠が大久保忠隣ただちかの小田原城にやって来て、城の破却を命じた日であり、加賀で、高山右近や小西如安が切支丹信仰のために召捕られた日に当たっている。

彼等はここで久しぶりに上陸した。

アカピュルコの官民は挙って彼等を歓待し、ここから彼等をメキシコ府に送りこんだ。

このメキシコ府において、一行中の随員六十八人は洗礼を受けて俄にわか切支丹になりました。むろん、中にはほんものの信者もあったであろうが、その中で、六右衛門常長だけは、わざと

洗礼を受けなかった。

彼一人は、エスパニヤに到着してから、王のすすめによって慎重に受礼しようと身構えてのことだ。

こうして、彼等がサン・ジュアン・デ・ウルア港で、再び乗船したのが六月十日。七月二十三日にはキューバ島のハヴァナを経て、大西洋からエスパニヤに着いたのが十月五日という旅程であったから、伊達政宗が、忠輝の浅草屋敷に着いて、

（——成程、事なく越後へ発ったと見えるぞ……）

忠輝の無事にホツとした頃には、支倉の一行は、まだメキシコ府に在ったことになる。

その意味では、大坂冬の陣と支倉六右衛門常長のエスパニヤ訪問とは、まさに寸刻を争う速度で進行を競っていた。

（——日本の誰にも出来ない事をしようとして、ここに一人の男が立っている！）

留守居の者から、忠輝はすでに高田へ発ったと聞かされると、政宗は、特に乞うて水辺の庭へ通り、そこへ床几しよくぎを出させて、しばらく待乳山まちちやまから御竹蔵おたけくらのあたりの風景に見とれていた。そうしていると、隅田の川面に立つ小波がそのまま大海原のうねりにふくらみ、都鳥の遊弋ゆうよくが大艦隊のそれに見えた。

（——柳生めが、出来ないことと、たかをくくっている……）

政宗はしばらく上下する艦音かんねに微笑をなげていたあと、腰をあげると今度は急いで町駕籠まちかごを呼ばせてそれに乗った。